

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 33

2012年7月発行

「自立生活プログラム・子ども版」 実践報告会 & 学習会

障害をもつ子どもの自立に向けて ～「地域」で暮らし続けるために～

【大阪ガスグループ“小さな灯”運動「子ども支援市民活動助成プログラム」助成】

2012年6月16日(土)13:30～16:00

大阪市立城北市民学習センター 講堂

参加者：65名

【自立生活プログラム子ども版】活動の運営委員：8名

ボランティア：7名、ほうぶスタッフ：6名



2010年度から行ってきた障害をもつ中高生の自立に向けた活動の実践報告会を開催しました。「自立生活プログラム・子ども版」の冊子をもとに実践報告を行い、プログラムのポイントなどを伝えました。「すまい・しごと・クッキング・おしゃれ」をテーマに活動してきましたが、「しごと」の活動での課題解決の糸口を見つけたいと、西成区で取り組まれている「プレジョブ」の紹介をしていただきました。最後に、地域においてどのような理解や工夫が必要とされているかを地域の皆さんや関係団体の方々と一緒に考えていきたいと思い、グループに分かれて意見交換をしていただきました。

障害児の保護者、障害者自立生活センターのスタッフ、中学や高校の教員、障害当事者、福祉関係の仕事をしている方々、そして、旭区老人クラブ連合会の方々が参加してくださいました。

85名余りでの学習会となりグループディスカッションで十分に発言ができなかったり、資料が足りなくなったり、ビデオの音響が悪かったりと、参加者のみなさまに大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。当日は、雨にもかかわらず、たくさんのご参加、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



<プログラム>

- 13:30 開会の挨拶 向井裕子（地域生活サポートネットほうぶ代表）
「自立生活プログラム・子ども版」実践に向けて ～自立ってなに？～
姜博久氏（障害者自立生活センター・スクラム）
- 13:50 実践報告と感想発表 「しごと」「クッキング」「すまい」「おしゃれ」
実践報告：向井裕子 感想発表：「すまい」「しごと」保護者、
「おしゃれ」子ども、
「クッキング」ボランティア
- ～ 休憩 ～
- 14:45 西成教育サポート7校区連絡会インクルージョン推進事業
「プレジョブ」の取り組みについて
西田吉志氏（株式会社ナイス 暮らし応援室）
- 15:10 グループで話そう
進行：新崎国広（地域生活サポートネットほうぶ・大阪教育大学）
- 15:50 閉会の挨拶
鳥海直美（地域生活サポートネットほうぶ副代表・四天王寺大学）
- 16:00 終了



<内 容>

■「自立生活プログラム・子ども版」実践に向けて ～自立ってなに？～

（障害者自立生活センター・スクラム 姜博久氏）

みなさんは、自分が自立していると思いますか？ 私たち障害者が考える自立とは、「一人で何でもできる」というのではなく、自分らしい生活、自分の思い描く生活を地域の中で、人とのつながりのなかで、他人の身体や頭を使って行うことです。しかし、多くの障害者は、外出、買い物、料理等、健常者が普段からしていることでも、その体験・経験の場を奪われている場合があります。それを取り戻すために、地域の自立生活センター等では、その経験の場として、さまざまな自立生活プログラムを企画・提供しています。今日は、その子どもを対象とした活動の報告です。

今回のほうぶの活動は、障害をもつ子どもたちが、地域で、あたりまえに生活していけるように、大人になる前に、住まいや仕事、家事やファッション等を楽しく経験するという貴重な取り組みです。こうした取り組みが、他の地域でも取り組まれることを期待します。そして、みなさんが地域でできることを考えてみてください。

■実践報告と感想発表

「しごと」「クッキング」「すまい」「おしゃれ」の実践報告と「自立生活プログラム・子ども版」のポイントを説明しました。写真を見ながら聞いていただいたので、より活動のようすが伝わったと思います。その後、子ども・保護者・ボランティアが、写真を映しながら感想を発表しました。子どもの発表は、自宅で原稿を作って何度も練習をしたそうで（保護者談）、当日は原稿を見ないで堂々と発表していました。

みなさん、熱心に聞いてくださり、時々、笑いや感嘆の声などが聞こえました。



■「プレジョブ」の取り組みについて (株式会社ナイス 暮らし応援室 西田吉志氏)

地域のリサイクルショップや花屋などで子ども達が仕事に取り組んでいるようすを映像を通して紹介していただきました。協力事業所(仕事を体験する場)の開拓、職場での個別の体験と交流会や学習会の開催、活動の周知徹底など、地域の学校と支援団体と住民という多くのつながりの中で活動されている実態をうかがうことができました。改めて、地域に密着した活動の必要性と地域のつながりの中で暮らしていくことの大切さを感じました。



■グループで話そう

▶ グループでの話し合いに向けて (進行 ほうふ 新崎国広)

しばらく〈ほうふ〉の活動に参加できていなかったのが、子どもたちの成長の早さに改めて感動しました。この時期の子どもたちに関わる周囲の取り組み(環境)の大切さを実感しました。そして、子どもが少し照れながらも自分の実践を堂々と笑顔で発表する姿を見て、「自立生活プログラム・子ども版」の意義を再確認できました。

今日は老人クラブの方々が多く参加してくださいました。「あさひあったかきち」(旭区アクションプランの実践の1つ)で、子どもたちと地域住民の方々が交流するプログラム(2010年度しごと体験)に取り組みました。障害のある子どもたちと住民に「出会いと対話・交流」の場を設けるなど、日頃から地道に活動していた成果が現れたと思います。

地域福祉に特効薬はないと考えています。そして、障害者の自立生活運動や地域福祉実践を展開する際に、「砦(とりで)」と「広場」の両方の機能が必要不可欠であると思います。「砦(とりで)」とは、ミッション(例えば、障害をもつ子どもや保護者の願い・想い)を発信し続ける場であり、当事者や家族を核とした個人や組織団体からの発信です。「広場」とは、「砦(とりで)」に共感する人々の輪を広げる取り組みです。「砦(とりで)」の意義を市民に広げ、共感者を増やす実践を行う場です。本人や保護者や組織が大切にしている、ミッション(願いや想い)を市民に広げ、一人でも多くの共感者を増やす場でもあり、地域福祉やボランティア学習の役割だと考えます。両者は、お互いに方法は違っていても、めざす方向(ミッション)が一致していれば、協働できるのです。両者は、時には、方法論の違いから意見が対立することもあると思います。しかし、両者が手を組まなければ(協働実践)ミッションの実現は難しいと考えています。

これから、みなさんに今までの報告や発表を聞いて、感じたこと考えたことを自由に話し合っていく時間を設けたいと思います。その話し合いのたたき台として、みなさんのお話し合いが深まるように3つの大切な点(キーワード)をお伝えしたいと思います。

【3つのキーワード】

- ① 自分らしく生きる
- ② 経験の大切さ
- ③ 子どもたち(人間)の可能性を信じる



➤ グループでの話し合い(抜粋)

- ・ 地域の方々からの声かけなど、特別なことをしなくても、日常生活の中の当たり前であることとして関わっていれば、負担も少なく、地域で支援していける。
- ・ 子ども達の経験は、親が思っているよりも大きな力になっている。
- ・ 一人とつながれば、また次の人とつながっていくことができる。出会いが出会いにつながっていく。町で障害者と出会った時の接し方も変わっていくと思う。
- ・ 昔はバリアフリー化されていなかったので、映画館でトイレに困ったが、障害関係の映画の時は、周りが助けてくれた。人間関係を自分たちから話したりして広げていくことも大切。
- ・ 都会の盲点として、孤独死といった現象がみられて、行政だけでなく、地域のつながりが大切。他人事ではなく、みんなでこのことについて考えるべき。老若男女関係なく考えるべき。
- ・ 自分のできることをしていきたい。もっと障害者と交流する機会が欲しい。
- ・ 皆で支えあうには、町会を巻き込んで、みんなで理解していくこと。
- ・ 今までは、障害をもつ人とどう接したらよいのかわからないと思っていた。また、地域でいろんな体験をしていることも、それを必要としていることも知らなかった。知れば、声かけも協力もできるようになってくる。まずは知ることから。
- ・ 我々は、障害がある・・・となると深刻に考えてしまう。深刻な状況であると感じてしまう。でも・・・みなさんには、日々あたりまえの日常のことなのだと思った。もっとかかわれる機会があったほうがよい。(理解を深めるために)

■ 閉会の挨拶

(ほうぷ 鳥海直美)

本日にご報告させていただいた<ほうぷ>の活動の根っこにある考え方について、2つお伝えしたいと思います。

1つ目は、「子どもの意見表明権」と言われるものです。子どもには、自分にかかわることについて、自分の意見をおとなに伝える権利があります。「子どもの権利条約」12条に定められています。「意見」というとき、わたしたちは言語を思い浮かべますが、障害をもつ子どもの「意見」は、表情や身ぶりやしぐさによって表現されます。つまり、おとなの側に求められていることは、子どもの表情や身ぶりから、子どもの思いを汲み取ることです。

さまざまな活動に取り組む子どもの表情から、「どのようにしたいのか」という思いを

汲み取ってきたつもりですが、受け止め方が間違っていたこともあったはずですが。それにもかかわらず、子どもたちは笑顔でもってチャレンジを続けてくれました。

(会場にいる子どもたちに向かって) ごめんね、そして、ありがとう。

2つ目は、本日に配付した報告集に記載されている障害者基本法です。

本事業に取り組んでいる只中の2011年8月に障害者基本法が改正されました。

その第三条では、「可能な限り、どこで誰と生活するかについての選択の機会が確保され、地域社会において他の人々と共生することを妨げられないこと」が新たに規定されました。

(『自立生活プログラム子ども版』2012年3月、59頁)

これは厚生労働省の役人が霞ヶ関でパソコンに向かって作ったものではなく、会場にいらっしゃる姜さんをはじめ、障害当事者による長年の運動によって改正されたものです。本文の「可能な限り」という言葉は多くの問題をはらんでいます。わたしを含めた健常者の側に問われている問題です。さらに、障害をもつ人が地域で暮らし続けることができるかどうかは、本日にお集りいただいた旭区で暮らす方々に投げかけられているものです。

ちなみに、身体障害者手帳を持っている人の約6割は65歳以上の高齢者です。高齢者の方々が住み慣れた地域で暮らし続けることができるかどうか、これもまた、旭区で暮らす方々に問われていることです。先ほどのグループワークで「他人ごとではない」という意見を多く聴くことができ、とても心強く感じました。

最後になりましたが、本活動にご協力いただいた皆様方にお礼を申し上げます。「地域で暮らし続けていきたい！」という挑戦状を、子どもから快く受け取っていただきました。今後、障害をもつ子どもたちが、この場にお集りいただいた皆様方のもとに挑戦状を届けることもあろうかと思えます。そのときには、受け取ってくださいますようよろしくお願いいたします。

<アンケートの集計から>

アンケート回収：50

良かった (43)

まあまあ良かった (4)

無記入 (3)

- ・障害児の社会参加につながる (21)
- ・障害児の自立に向けた活動につながる (16)
- ・新しい気づきがあった (32)
- ・役立つ情報が得られた (12)
- ・日ごろの活動に役立つと思った (13)
- ・他の参加者と交流がもてた (15)



<アンケートの感想から>

- ・公共機関のみでなく、地域・民間の力の大きさを強く感じました。
- ・社会参加が大切と思った。プレジョブは初めて知りました。良かったです。

- ・ いろんな事ができるのに、親が勝手に決めてしまっていることがあると思った。生きるためにと考えていましたが、おしゃれも普通に大切と思いました。
- ・ 地域の中でのほうぷさんの活動がよくわかりました。地域の中でサポートしていけたらと思いました。
- ・ いろんな取り組みの報告を聞けてとても面白かったです。クッキングの報告で、あえて料理を普段しない男子学生の多い大工大のボランティアさんと一緒に、先走った支援にならない状況を作っているのが良いなと思いました。
- ・ 失敗体験が必要だということにハッとさせられました。うまくいくようにとか、失敗しないように子どもを導いていた自分を振り返り、考えさせられました。
- ・ 自分では気づかないことが発見できて良かった。グループで話してみると、自分とは違った意見が出てきて勉強になった。
- ・ 地域の方々の素直な意見が聞ける場をもてて、とても良かったです。
- ・ 自分が働いている区では、障害児本人中心の活動は弱いなと改めて感じました。発表された人の表情も内容も、みなさんとても良かったと思います。
- ・ 障害者の方の自立されている姿を見せてもらい元気をもらいました。
- ・ 私も日ごろから地域との関わり大切さは感じています。また、子どもの自立についての考え方は、何かができるということより、自分で好きなものを選べるということではないかと言われたことについて考えさせられました。
- ・ 障害者も健常者もみな同じ。色眼鏡していなつもりでも、やっていたと思います。
- ・ 西成のネットワークはすごい！うらやましいです。
- ・ 高齢者が元気。世代間ギャップを擦り合わせるには多くの時間が必要。



生まれた時、医師に「生きていくことはできない」と言われた娘から、「命の重さ」を教えられました。意見表明の困難な娘と暮しながら、「子どもは親のモノではない」と自分に言い聞かせてきました。先月、6歳未満の子どもの脳死「臓器移植」が行われました。そして、親の決断が美談のように報道されました。医療や報道のあり方に大きな疑問を感じました。幼い子どもの場合、臓器提供の意思表示は親によるもので、子ども本人によるものではありません。

みなさん、「生きる」ということについて、考えましょう！

